

日本環境共生学会 第18回（2015年度）学術大会 実施報告

1. はじめに

2015年9月26日（土）～27日（日）の2日間、茨城大学農学部（阿見キャンパス）において、日本環境共生学会 第18回（2015年度）学術大会が開催された。

初日の9月26日の午前中は、茨城県つくば市にあるソーラーカルチャー株式会社および龍ヶ崎市にある有限会社横田農場へのテクニカルツアーが実施された。午後は、開会式が行われ、木村美智子大会実行委員長、林良嗣学会長、開催校の久留主泰朗農学部長、ならびに阿見町生活産業部長の湯原幸徳氏から挨拶があった。その後の学会賞授賞式に続き、三村信男茨城大学長による特別講演「気候変動と未来社会」が行われた。続いて、「震災復興を超えた食と農の環境共生のかたち」というテーマでシンポジウムが開催された。2日目の9月27日は、3会場で口頭発表、1会場でポスター発表が行われた。各セッションでは、災害問題、都市・地域政策、震災復興、環境教育、環境・経済評価、環境意識と市民、生態系、エネルギーなど多岐にわたる課題について、環境共生という共通テーマのもと熱心な議論が展開された。

2. テクニカルツアー

17名が参加したテクニカルツアーでは、つくば市と龍ヶ崎市の2か所を訪れた。最初の視察地、つくばソラカルファーム発電所（つくば市）では、代表取締役社長の松岡顕氏から、会社の敷地内に設置されたソーラーシェアリングシステムの説明を受けた。579枚の太陽光パネルが地上3.5mの高さに設置されており、パネルは手動で向きを変えられることができる。太陽の動きに合わせてパネルの向きを変えられるため、固定式パネルよりも効率的に発電ができるとのことである。また、地上から3.5m離れているので、パネルの下で作物を栽培できるというメリットがあることから、太陽光発電と農業の一石二鳥を目指す次世代型農業を提案している。このシステムが普及するためには、農地法をはじめとする様々な規制をクリアすることが必要であるが、新しい農業のあり方を提案する技術になることが期待される。2か所目の視察地である横田農場（龍ヶ崎市）では、代表の横田氏より、農場が法人化された平成8年当時16haだった農地が現在では125haまで拡大し、大規模稲作経営を行うに至った経緯が紹介された。近隣農家の高



写真1 つくばソラカルファーム発電所



写真2 横田農場

高齢化が進み後継者がみつからず、農地を維持できなくなっている中で、農業実績を挙げている横田氏に農地を任せる農家が増えてきてことが、大規模経営に発展していった。IT を活用して省力化を図り、環境共生型の農業に取り組み、経済効果を生み出す工夫を進めたことが天皇杯受賞につながったようだ。大規模経営を円滑に進めていく上で課題は山積しているが、今後は、生産者の立場に留まらず研究者の視点からも農業経営を考えていきたいという横田氏の話に、日本の新たな農業のかたちが見えたように思われた。

3. 特別講演

茨城大学学長 三村信男氏による特別講演「気候変動と未来社会」が行われた。三村氏は、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第5次報告書で総括執筆者を担当するなど、気候変動研究における世界的なエキスパートである。講演では、確実に進行している温暖化など気候変動の現状と将来予測、気候変動が社会や生活に与える影響と適応策について紹介があり、世界の視線は、持続可能な未来社会を構築するポスト炭素社会時代に向かっていることが報告された。

4. シンポジウム

シンポジウムは、日本環境共生学会主催、公益社団法人土木学会共催、阿見町の後援を受け、「震災復興を超えた食と農の環境共生のかたち」というテーマで開催された。最初に、木村美智子大会実行委員長より「茨城県は農業産出額全国2位の実績がある一方、東日本大震災による影響は農業に大きな傷跡を残した。今年で震災後4年が経過し、次のステージを意識した新しい環境共生型農業のあり方について議論したい」というシンポジウムの趣旨説明があった。

研究者、行政、生産者、技術者のそれぞれの立場から4名のパネリストに話題提供をいただいた。最初に、小松崎将一氏（茨城大学農学部教授）から「農地での放射性物質の動態と作物への移行抑制」について最新の研究成果をご報告いただいた。方波見誠氏（茨城県庁農林水産部産地振興課エコ農業推進室室長補佐）は「エコ農業茨城の展開」と題し、震災による風評被害を乗り越えていくこれからの農業のあり方を示唆する話題の提供をいただいた。玉造洋祐氏（有限会社ユニオンファーム代表取締役社長）は生産者の立場から「新農創造一育てる 夢をみる」、松岡顕氏（ソーラーカルチャー株式会社代表取締役



写真3 三村信男氏による特別講演



写真4 シンポジウム

社長)は技術者の立場から「太陽光発電を活用した、新時代農業への挑戦」、と題して新しい農業のかたちをご提案いただいた。

5. 学術セッション

学術セッションとして口頭発表とポスター発表が実施された。口頭発表では、一般セッションと企画セッション合わせて12セッションに分かれて実施された。このうち、一般セッションでは29件の発表が行われた。

ポスター発表では、2日間にわたるポスター展示と、27日のコアタイムにおいて10件の発表があり、各ポスターの前では熱心な発表とディスカッションが行われた。



写真5 口頭発表会場



写真6 ポスター会場

6. 学会賞授賞式

27日の午後には、学会賞授賞式が開催された。木村美智子表彰委員長による挨拶の後、林良嗣会長から学会賞が授与された。受賞者は次の方々(敬称略)である。

論文賞：谷 佑亮(和歌山大学)、中尾彰文(和歌山大学)、山本祐吾(和歌山大学)、吉田登(和歌山大学)

論文賞：稲森 優吾(関西大学)、盛岡通(関西大学)、尾崎平(関西大学)

著述賞：原科 幸彦(千葉商科大学)、小泉 秀樹(東京大学)、柴田 裕希(東邦大学)、姥浦 道生(東北大学)、松行美帆子(横浜国立大学)、片山 健介(長崎大学)、多島 良(国立環境研究所)、風見 正三(宮城大学)、村山 颯人(東京大学)、村山 武彦(東京工業大学)

環境活動賞：岡田 学(長野工業高等専門学校)

環境活動賞：名古屋大学エコトピア科学研究所 林研究室(代表者 林希一郎)

さらに、本年5月30日に開催された日本環境共生学会地域シンポジウム・ポスターセッションの優秀発表賞の授与が行われた。受賞者は次の方々(敬称略)である。

優秀発表賞(個人会員)：大西 暁生(国立環境研究所)

優秀発表賞(院生・学生会員)：猪原 暁(名古屋大学)

7. おわりに

26日夜には、約30人が参加し、こぶし会館(農学部)において懇親会が行われた。午後のシンポジウムで基調講演をいただいた三村信男茨城大学長のスピーチをいただ

き、さらには、地元阿見町の「君島芸能保存会」の皆さんによる「ひよっこ踊り」が披露され、なごやかで、楽しい一時を持つことができた。

84名が参加した2日間にわたる学術大会が滞りなく終了した。これも大会の準備や運営に際して多くの方々にご協力、お力添えを賜ったことによるものであり、すべての皆様に感謝を申し上げたい。



写真7 学会賞授賞式



写真8 懇親会